



バスク地方

今回の巡礼に出るまで、バスクがフランスにも関係があることを

全く知らなかった。地図にあるようにサビエルが生まれた一五

〇六年ごろは、フランス、スペインの両大国に挟まれてナバラ王国というバスク人の国家があった。領土は現在のスペイン



16世紀のころのナバラ王国

ン・ナバラ州だけでなく、ピレネー山脈を越えてフランスにも広がっていた。

サビエルの父親はナバラ王国の王室会議議長を務める有力な貴族であった。

しかし、サビエル六歳の一五二二年、フランスとスペインの間で戦争になり、ナバラ王国はフランスの味方をしたが、戦いはスペインの勝利に終わり、ナバラ王国はスペインに併合された。

さらにナバラ王国のピレネーを越えたフランス側の地域はフランス領となり、国境はピレネー山脈となった。

そのためバスク人はフランス籍(五万人)とスペイン籍(六十万)に分断されて現在に至っている。

こうした歴史的経過を知ると、バスクが独立を求める気持ちはわかるような気がする。

しかし、サビエルと一緒にイエズス会を創立したイグナチオ・ロヨラは同じバスク人で

も、先の戦争ではスペインの騎士として戦っている。

そして、フランス軍の砲弾でケガをしたのをきっかけに神への奉獻生活を送るようになった。

敵、味方に分かれた二人が一緒になってイエズス会を創立したというのだから何とも不思議な巡り合わせと言えない。

フランスとスペインに分断されても、ともにバスク人であり、信仰深い民族だった。サビエル、ロヨラという聖人を出した影響もあるのだろうが、バスク人からたくさん神父が出ています。

来日したフランス籍バスク人のカンドウ神父は、昭和三十年から五十年代にかけて活躍され、カンドウ全集も出版されている。我が家にも一冊だけあるが、その冒頭にある神父の写真は、バスクのベレエ帽をかぶったものだ。

私もはげ頭を隠すた

スウェーデン・ブランドの帽子



めバスクのベレエ帽を捜し求めたが、残念ながら手に入れることができなかった。その代わりに買ったのは写真のスウェーデン・ブランドだった。

あとで帽子の裏の小さな横文字を調べたら、最後に「メイド・イン・チャイナ」とあった。偽ブランドなのか、メーカーが人件費の安い中国で作ったのかどうかはわからない。

余談になったが、バスク出身の徳山カトリック教会のオレギ神父は、最近のバスクの子供たちは学校できちんとバスク語を習っているのだ、自分たちより

きれいな言葉を話すと喜んでおられた。ローマ軍が攻めてきた時も、ピレネーの上まで来ることはなく、バスクの人たちは独自の言葉や文化を守り続けた。

体格も良く、力自慢の男性が多く、石を持ち上げたり、丸太を切ったりする競技など、独特な文化が今も傳承されている。

グロバル化といえは聞こえは良いが、大国や国家権力で、小さなもの、弱いものを壊すことなく、それぞれの民族の文化を大切に伝えたいものである。(山口放送元取締役ラジオ局長)